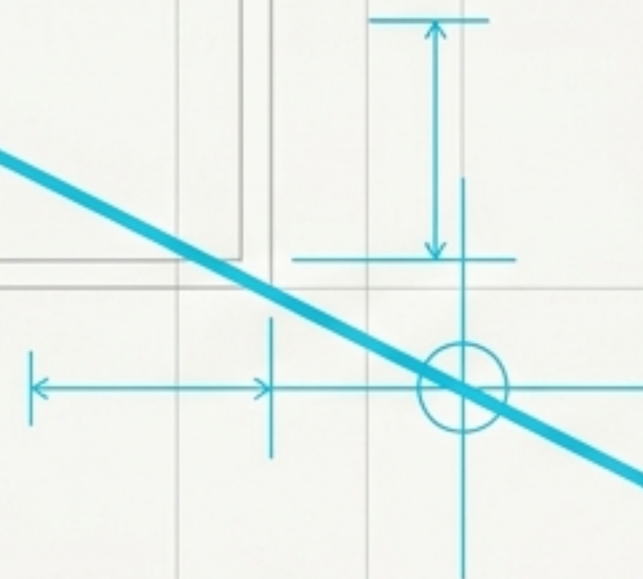




敗北を「設計図」に変える技術

指導者のための具体論パラダイムシフト

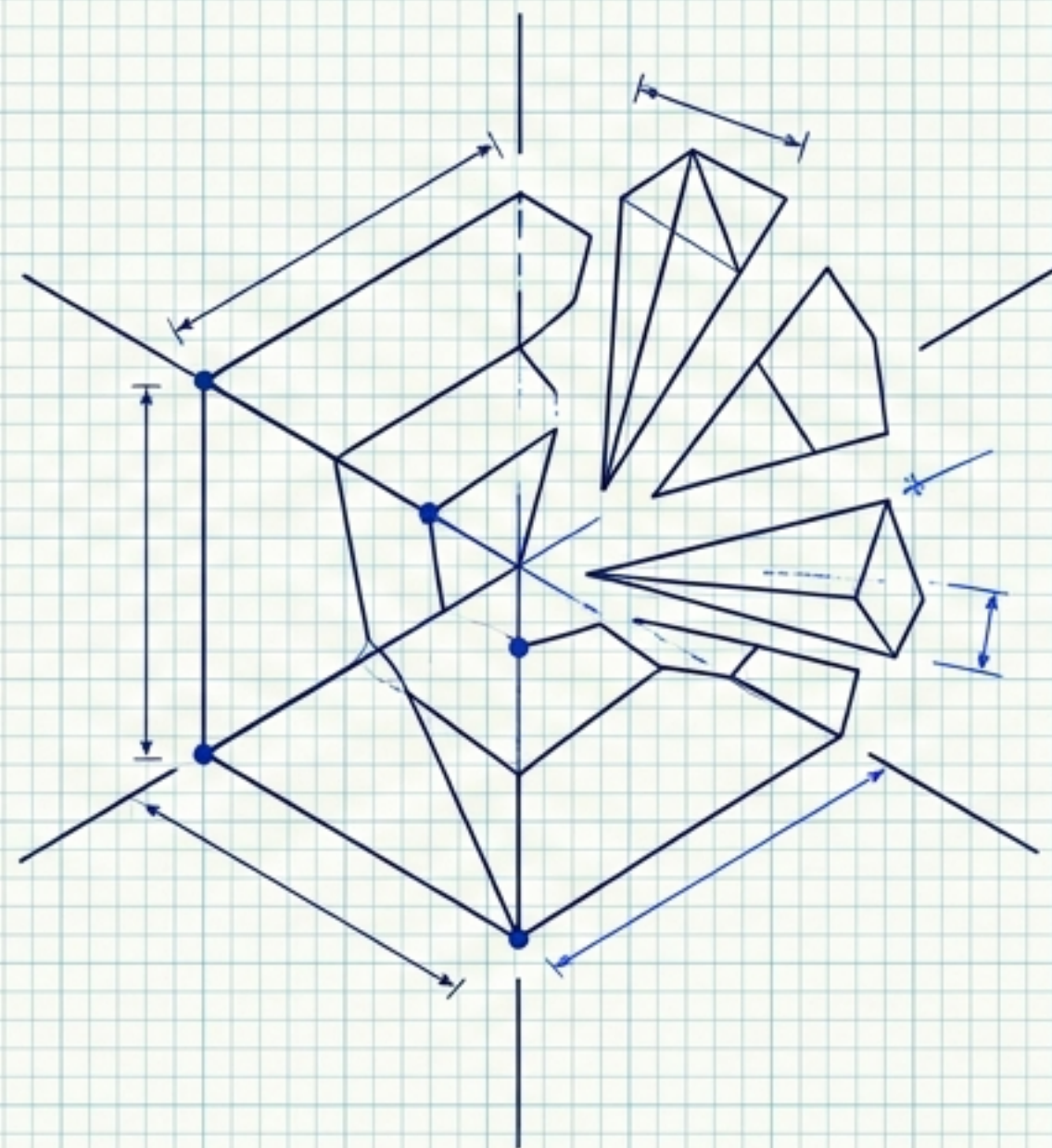
PHOENIX愛知 理念と実践



勝った瞬間や調子が良い時に、 指導者は試されない。

選手が負けた瞬間。悔しくて、混乱して、
心が少し壊れかけているその場面にこそ、
指導者の技術・人間理解・責任感が
浮き彫りになります。

負けた瞬間、指導者の
資質は丸裸になる。



負けた瞬間に現れる「三流の反応」

逃避

アクション: 沈黙し席を離れる

指導者の錯覚:
「選手に考えさせている」

現実の姿:
敗戦後の難しいコミュニケーションからの逃避。
一番情報を必要としている選手を見捨てる行為。

怒り

アクション: 怒るだけ

指導者の錯覚:
「熱量を伝えている」

現実の姿:
選手の行動を変える情報はゼロ。
ただの感情処理であり、挫折感のみを植え付ける。

称賛

アクション: 称えるだけ

指導者の錯覚:
「努力を認め、寄り添っている」

現実の姿:
現実をぼかす行為。敗戦を綺麗な言葉で「消毒」し、成長の機会を奪う。

敗戦を綺麗な言葉で「消毒」してはいけない。

表層的な優しさ

「よくやった」「努力は伝わった」

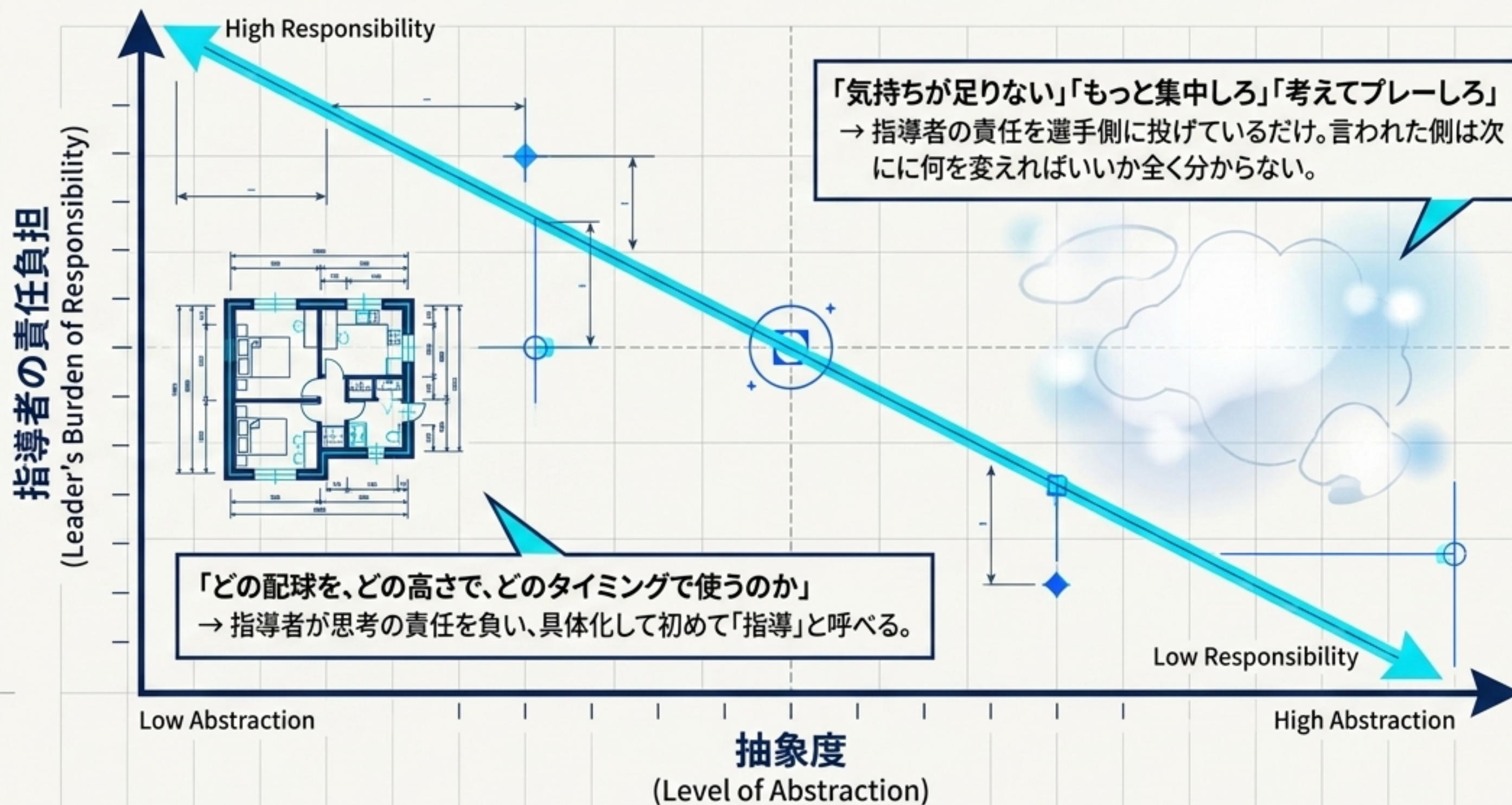
傷を覆い隠し、現実をぼかすことで、
次に進むべき道を奪う。

具体論というメス

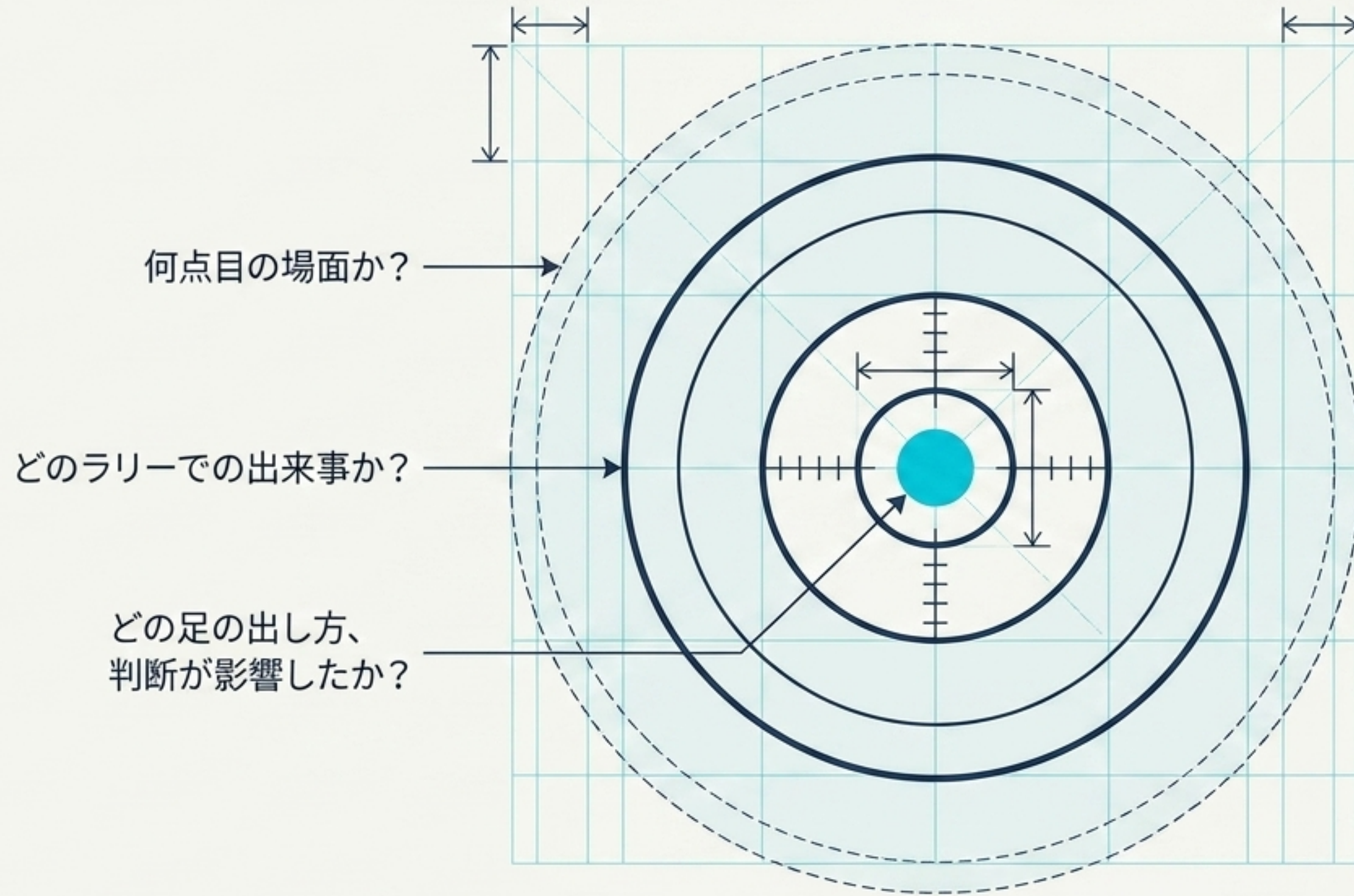
現実を直視し、原因を解剖する。

表層的な優しさが孕む残酷さを捨て、
選手の未来の成功をプログラミングする。

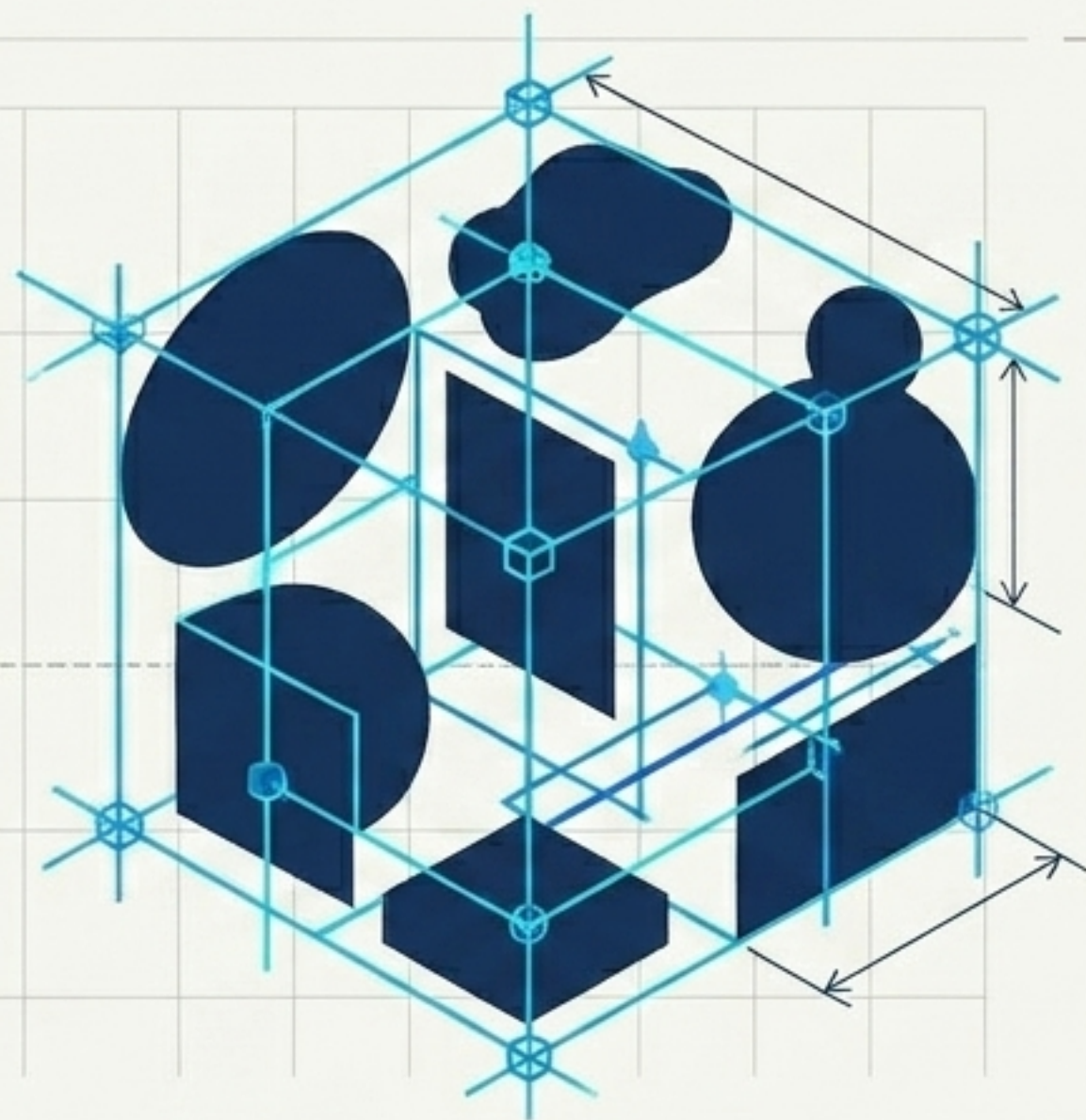
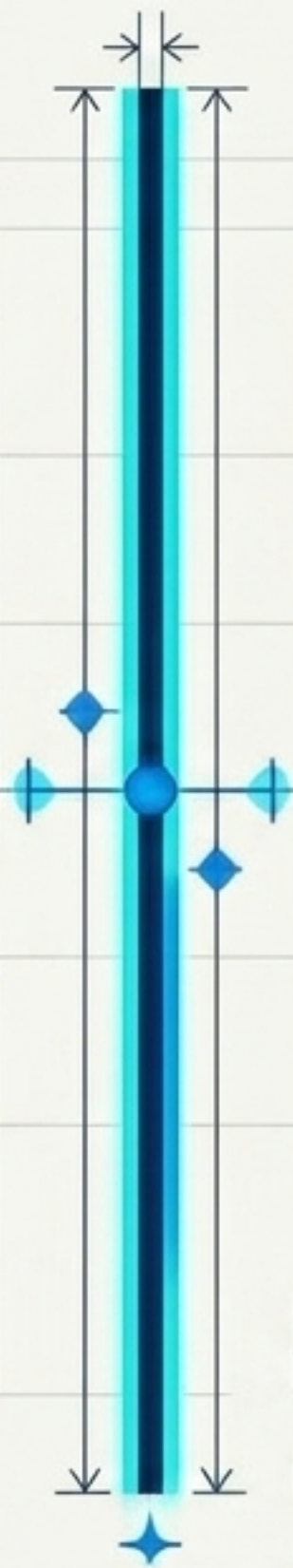
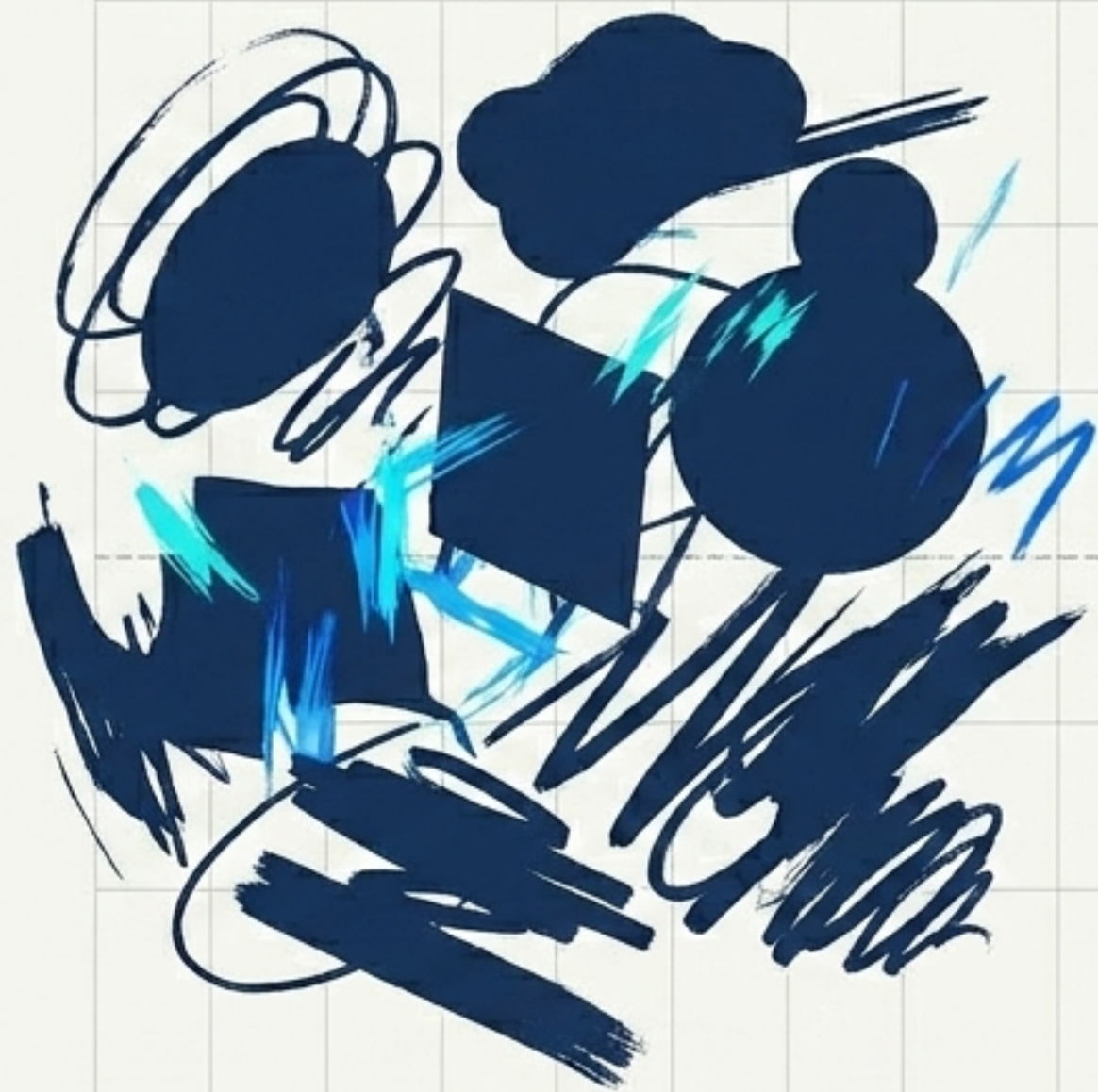
抽象論という名の「無責任」



指導の「解像度」を極限まで引き上げる



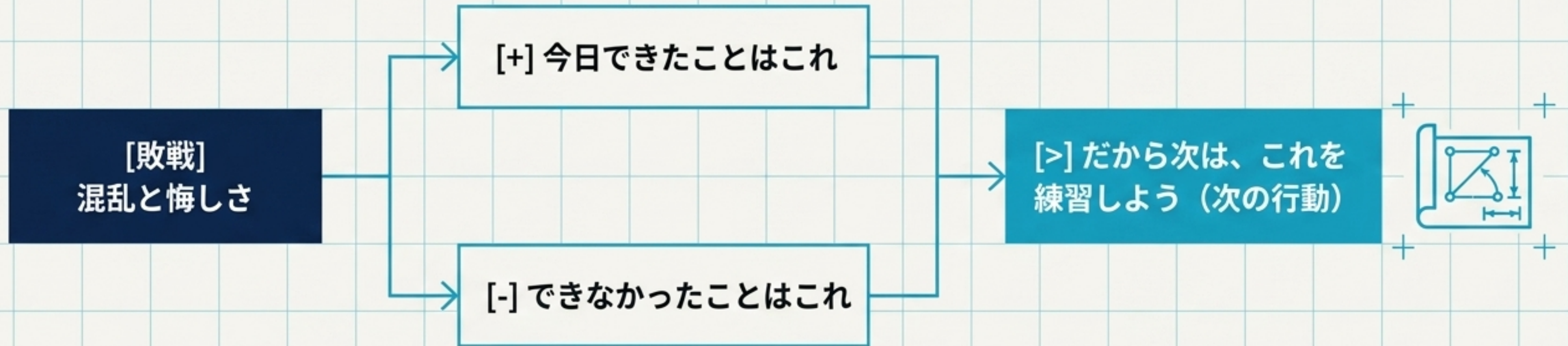
感情に流されず、ここまで具体化する問いに答えられるか。
それが指導者のチェックポイント。



感情処理から、構造設計へ。

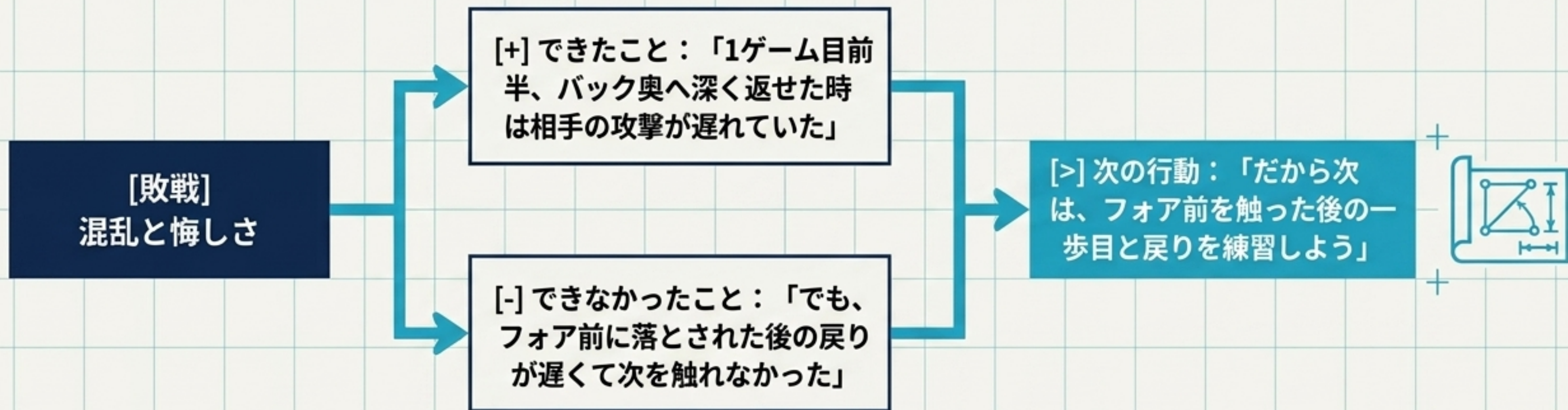
信頼できる指導者は、負けた選手に「感想」を渡さない。
必ず「次の行動」を渡す。

敗戦を「次への設計図」に変える3つのステップ



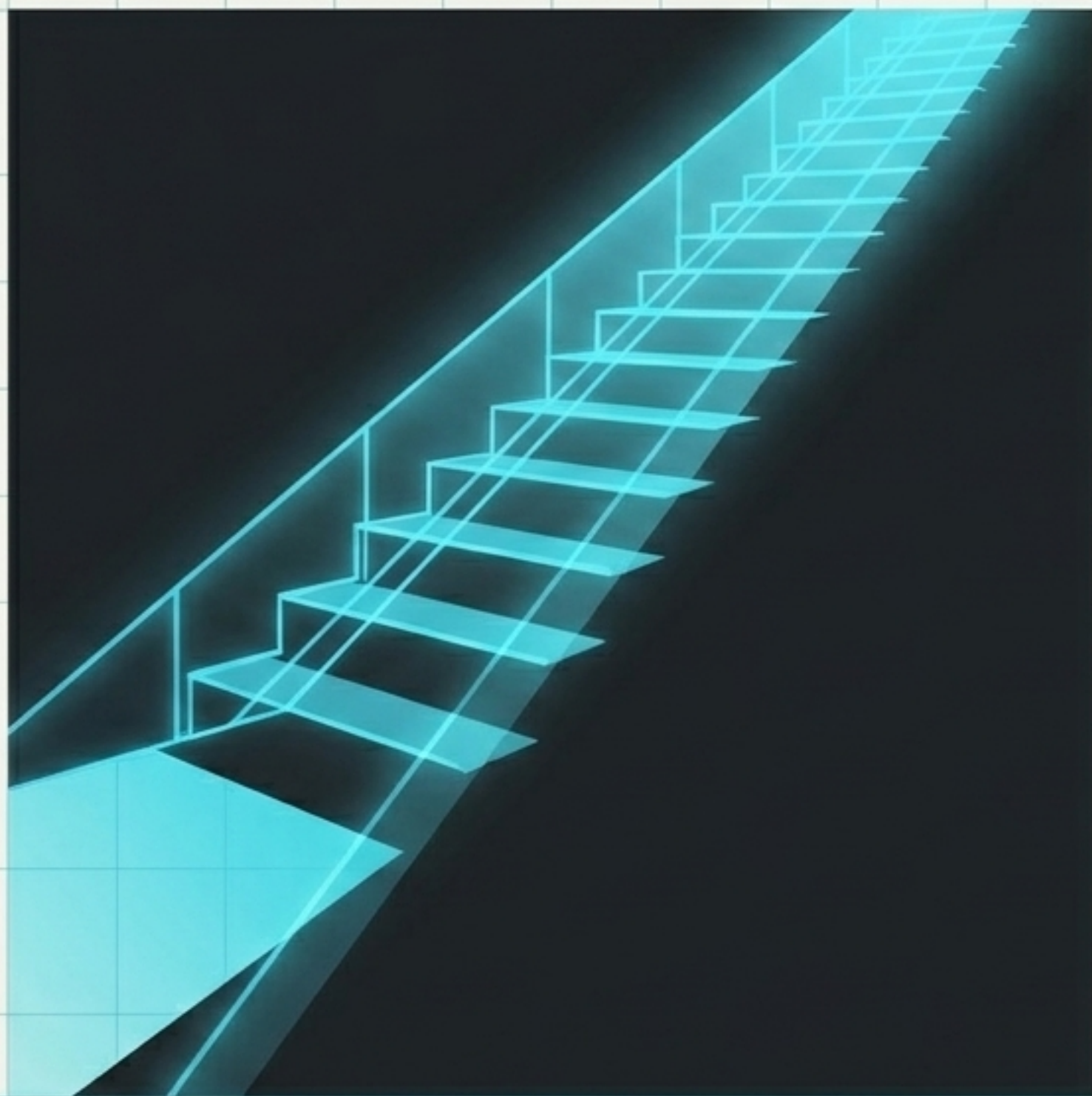
ここまで語り切ることで、敗戦はただの悔しさで終わらず、次の練習の強固な設計図となる。

[具体例] 感情ではなく、構造で語る



選手は「この人の言葉なら次に使える」と感じ、それが揺るぎない信頼へと繋がる。

暗闇の中で、次の一步を照らす「具体的な光」



人間同士の「熱」と「具体論」が交差する瞬間に生まれる成長のドラマ。

抽象的な励ましに逃げず、現実を直視し、未来のために具体的な言葉を紡ぎ出すこと。

それは選手の未来の成功をプログラミングするような、尊く、愛に満ちた作業である。

今日の格言

**「負けた瞬間に、指導者は丸裸になる。
黙って離れるな。怒りで潰すな。称賛でぼかすな。
できたこと、できなかったこと、次にやること。
敗戦を具体論で設計図に変えられる者だけが、
信頼される指導者である。」**